

とある陰陽師の物語

百夜真琴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦1470年日本は、「妖怪」に脅かされていた。そこに陰陽師達が現れて街に結界を貼り妖怪達から人々を恐怖から守った。

そして西暦2000年

今でも妖怪達による恐怖から人々を守っている多数の陰陽師達がいる。

この話は、ある陰陽師の一族の一人の少年とその仲間たちによる陰と陽の物語である。

1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
26	23	21	18	15	12	9	6	3	1

目
次

1話

とある夜、ある山の中にある古びた寺の外に一人の少年がいた。

その寺は、昔は使われていたが今では廃墟と化していた。彼方此方で木が腐っていて今でも崩れそうな寺に少年は入っていった。

寺の中に入り部屋の真ん中に立つと少年は動くことはなかった。

しばらくその場に立っていると周りから物音がした。

すると物音したかと思えば、周りは妖怪達に囲まれていた。

カマキリのような手を持った妖怪や3つ目の妖怪、首が2つある妖怪などがうようよいいる。妖怪達は久しぶりに獲物にあつたのか笑いながら、獲物が来たやここに来たことを後悔するんだなど言っている。少年は驚くこともせず妖怪達に向かってこう口走った。

「それはごつちのセリフだよ雑魚妖怪。まんまと罠にはまってくれて助かったよ。」

それを聞くと妖怪達は、人間風情が何をほざいてんだと、抜かしている。少年は札を構えある言葉を唱え始めた。

「この世に災いをもたらすもの達よ。何次これを祓わん、急急如律令」少年が唱え終わると札は光初めてあたりにいた妖怪達は火矢でも打たれたかのように燃えていった。

それを見て少年は妖怪達に向かってこう口走った。

「俺は、陰陽師の一族の一つ三神家の三神陽介。妖怪達は残らず俺が消し去る。よく覚えておけ。」

陽介がいい終わる頃には妖怪達は残らず消えていた。

全て消え去ったことを確認をすると、陽介はほっと息を吐いた。

よほど緊張していたのか陽介は寺の外に出るとその場に寝ころびしばらく動くことはなかった。

しばらくして陽介はその場に立ち山を降りて行きながら、何やら文句を口走っていた。

「あのクソ親父俺がやらなくてもあんな雑魚妖怪弟達で十分だろうが、なんで夜に俺がこんな山の中に来なきや行けねえんだよ。」

先ほどまで、妖怪を勇ましく祓っていたものとは思えない口調の陽

介。

しばらくブツブツ言っていると道に迷ってしまった。

「くそ、ここどこなんだよ。」

迷いながらも進んでいるとある小道に出た。これで帰れるとその道を進んでいくとある小さな小屋の前に出た。

その小屋の周りには陰陽師がつけたと見られる古い結界が貼られていて誰も入れないようになっていた。

「なんなんだこれ。」

と気になった陽介がその結界に近づくと札が燃え結界が消えてしまった。

何が起こったか分からない陽介はとにかく中を確認したいという気持ちでいっぱいになりその小屋の中に入っていった。

この小屋に入ったことで今後陽介の未来は揺れ動いた。

2話

なぜか結界が消えた小屋が気になった陽介は入って行った。

「特になんもないか？・じゃあなんで結界があつたんだ？」

少し疑問も感じながらも陽介は部屋の中に入っていく。

少しずつ奥へ進んでいくと祭壇のような部屋についた。

「何だこれ？」

陽介が目にしたのは部屋の真ん中に刺さっている謎の刀、そしてその刀を守るかのように幾つもの縄と結界の札が貼られていたそしてその札は、小屋の周りにあつたものと同じように縄と札が燃えた。

札が燃え尽きてその部屋には謎の刀だけになった。

刀に近づいていくと不思議なことに刀が光り始めた。

「何だよこの刀、ただの刀じゃねーのかよ何でここの結界は燃えるんだ？」

やはり陽介は、結界が燃えることに疑問を抱きながら刀に近づき、目の前に着いた。

「まあこの刀抜いてみるか。」

陽介はこの彼方が何なのかも考える前に手に取ることにしました。

「結界があるんなら、強い刀だろうし、これがあれば親父も驚くだろくな！」

ちよつとした期待を膨らませ陽介は刀を引き抜きました。

するとその部屋は光に包まれ眩しさのあまりに目をつぶった陽介が目を開けると、真っ白な空間の中にいました。

行き止まりが見えないとても広い空間陽介は何が起こったか全く理解できていません。

そのままあたりを歩いて状況を理解しようとしていると先ほど引き抜いた刀があつた。

しかも、隣に何やら人影が見え陽介はそのものにここが何処か聞こうと駆け寄るとそのものがこちらに話しかけてきました。

「やあ初めまして。僕の名前は羅刹つて言うんだ。封印を解いてくれてありがとう助かったよ。」

そのものは、女のような長い髪に白い肌、赤い瞳そして鬼のような角があった。

そして羅刹が言った封印を解いたの意味がわからなかった。なぜなら自分は何もしていなかったからだ。

と、陽介が考えていると羅刹が聞いてきた。

「そういえばまだ聞いてないね、君の名前。教えてよ。」

これは答えても良いものなのかと考えていたはずなのに口が動いていた。

「俺の名前は、三神陽介。」

それを聞いた羅刹は、陽介に向かって質問をしてきた。

「へー陽介ね。久しぶりだよこの空間に君ら一族が来れたのは。」

それを聞いた陽介は身に覚えのないことなので否定しようとしたら、その間もなく羅刹は言い放った。

「まあ別にいいか！封印が解けたんだから喜ばなきゃもう何百年も封印されてて、うんざりだったんだよね。」

陽介には何を言ってるか全く理解できていなかった。

そして羅刹は陽介に言った。

「君は僕の封印を解けた。だから君が僕の持ち主だ。封印を解いた君は強い。だから力を貸してあげる。僕は君の刀になる。」

陽介には何を言ってるか全く持って理解できてない。

なので羅刹質問をして理解しようとしたのか、陽介は羅刹に聞いた。

「いや、ちょっと待て！まずお前は何なんだ！俺はお前の封印を解いた覚えもないし、力を貸すってどんな力だよ！」

それを聞いた羅刹は、少し考える表情をして陽介に質問の答えを返した。

「そういえば僕が何者か言ってなかったね。僕は君が抜いた刀の中にある鬼だ。だから君がこの刀を使えば、僕の力が解放されて君は僕と一心同体になる。簡単に言うると鬼になる。」

言い終わったかと思うと羅刹は言い忘れたかのように告げた。

「あーちゃんと言つとかないとね、鬼の力を手に入れられるだけで、鬼

になるわけじゃないからさ安心してね」

そして羅刹は俺に問いてきた。

「それでどうする、僕を受け入れて契約する。」

陽介はその質問の答えは話を聞いてる時に決めていた。

「ああ決めたよ。鬼、俺に力を寄越せ。俺は、親父を越す力がある人を守る力があるそのためにお前を利用する。それでもいいか？」

羅刹は、少し笑みをこぼしその問いかけに答えた。

「ああ勿論いいよ。さあ刀を抜いてそれで契約成立だ。」

それを聞いた陽介は刀を抜いた。

その瞬間、周りが初めて抜いた時のように光に包まれた。

そして羅刹はその光の中で陽介に言った。

「僕は君の刀になろう力になろう。これからよろしくね陽介。」

その言葉を聞き終わると周りが闇に包まれ不意に目をつぶってしまった。

そして目を開けると山の中の古びた寺の前にいた。戻ってきたのだ。

「あれは、夢だったのか？」

いや違うなぜなら今俺のこの手の中に羅刹があるのだから。夢ではなく現実であった。

「早く、帰ろ。」

そういつて陽介は山を降りていった。

この刀羅刹との出会いが彼の運命を突き動かしていく。

3話

山を抜けることができ家まで帰ることができた。

陽介の家は、昔各地で結界の守りやお祓いなど、様々なことをしていたので格地方に散らばらないといけなかったため、東京で関東地区を受け持っている。

家に着きドアを開けると

「お帰り陽兄ちゃん。」

下の弟6歳の光

「遅かったじゃん兄貴。」

光より上12歳の弟悠斗

「悠斗そんな言い方ないだろ。お帰り兄さん。」

悠斗と双子の弟冬馬

「陽介ちゃんと祓えたんだろうな？」

俺より上の雅次含む兄弟達が玄関で迎えてくれた。

「ただいま、じゃなくて何でみんな起きてんだ？もう23時だぞ。」

みんなが一度顔を見合わせて雅次が言った。

「陽介、お前が失敗しないか気掛かりだったんだ。」

雅次兄さんが言うのと3人は首を縦に振った。

「もう、分かったちゃんとか祓ってきたから心配しなくていい、もう寝ろ

よ、兄さんも、」

『はーん』

雅次兄さん以外が返事をしている中俺は部屋に戻った。

俺の家は家族が多いと思う。

1番下の光、双子の悠斗と冬馬、兄の雅次兄さん、そして今親父の仕事を変わって受け持っている姉の桜姉さん、そして親父の重吾。

この家は関東の中でもトップに近いだろう、今は亡き陰陽師の神と言われていた安倍晴明様が召喚していたと言われている十二の式神の名を受け継いだ十二神将の一族の一つだその中でもこの家は「青竜」の名を受け継いでいる。

俺は自分の部屋に入ると、何か忘れていたような気がしていた、す

るとそこに雅次兄さんが来た。

「陽介、父さんに報告に行ったのか」

それを聞いた俺は慌てて刀を隠して部屋を出て兄に、

「ありがとなー！兄さん。」

そして父さんがいる部屋の前まで行くと一度息を吐き気持ちを落ち着かせて呼びかけた。

「父さん、俺陽介だけど」

すると中から声が聞こえてきた

「陽介か入れ」

中に入ると親父は、自分の前にある一つの手紙を置き座っていた。

「今日は、どうだったんだちゃんとか被えたのか。」

親父の後ろには水晶があるそれは、あらゆるものをその場から見る
ことができる。

おそらくそれを見てたであろうに…

「水晶で見てたくせに、分かってるんだろ。」

それを聞いた親父は、少し険しい顔をして話し始めた。

「ああ見ていた。お前が刀を取るところまで。」

やっぱりしてるんだと思つた俺は親父に聞いた。

「なあ親父あの刀はなんなんだ。」

すると親父は。

「あれは、先代安倍晴明様が鬼を封じ込め我々陰陽師の力に変えたと
言われている神器のひとつだ。そしてそれは、十二神将へと受け継が
れていったが使えるものは誰もいなかった。」

俺はそれを静かに聞いていた。

「お前がその刀を手に入れることができたなら、それはお前の刀だ。」

親父はそう言うと、俺にひとつの手紙を差し向けた。

「これはなんだ？」

親父は開ければわかるといった。

く今回、式神の名を与えられし十二神将達への伝令です。6月初め
より、三神陽介、天若雪乃、月影風雅、唐沢未来、神山陵、山口浩介、
西野天都、野良竜司、中村彩乃、御幣島祐樹、川上千里、八戸祐美、以

上12名を次の十二神将候補として合宿を行う。場所は東京にある私の別荘で行う。もちろん学校の転校手続きはこちらで行うので心配は要りません。場所は地図を同封されています。各自準備しておいてください。ではまた別荘で。安倍義政く

この手紙を読んだ俺は、焦ることしかできなかつた。

「なんで俺なんだよ！雅次兄さんの方が強いのに」

少し焦っている俺に親父は、「義政様もお前が神器を手に入れることを分かっていたのかもしれないな。」

そのあと俺は必死に抵抗したが、義政様の命という事で合宿に参加することになった。

く12人集合まであと2週間く

4話

12人の十二神将候補者による合宿まで2週間になった。その日まで元から東京にいる俺にとっては、それまでが暇でしかなかった。

だってそのための準備なんてほとんどないだから。

俺は転校しなくていいのでいつも通り学校に向かっていると…

「陽介おっはよく。」

背後から押されて一瞬ふらついたが体制を立て直し後ろを向くと、栗色の長い髪を後ろでくくり、緑色の目をした俺と同じ制服を着た者がいた。

こいつは天若雪乃、俺と同じ陰陽師で今回の合宿に呼ばれている白虎候補者だ。

しかし雪乃は戦いに慣れていない。

「雪乃、相変わらず元気だな。」

こいつも呼ばれたんだよな、大丈夫なのか…と心の中で考えていると、

「合宿、なんで私たちなんだろうね…」

不安そうな雪乃に俺は少しでも不安を消そうと…

「合宿まであと2週間もあるんだからさ、学校でそんな顔してるとみんなが心配するぞ。」

雪乃は気持ちが軽くなったのか笑顔で、

「ありがとう、そうだね元気でないきゃ！」

そう言っ学校に向かった。

学校から帰ると兄弟達との手合わせ、霊符の錬成、取り憑かれたもののお祓い、ここまではいつもの事。

しかし、もう少しで合宿だからと、雅次兄さんがいつもの倍の練習量が出されてもうクタクタ。

でもそんな日常はあつという間に過ぎていった。

6月1日、今日からしばらく家を離れての合宿が始まる。

そろそろ出るかと用意をしていると玄関から聞き覚えのある声が

聞こえて来た。

「あの、陽介まだ居ますか？少し不安なので一緒に行こうかと…」

雪乃だ、俺は挨拶に行こうとしたら雪乃は兄弟達に囲まれて居た。

「雪乃ちゃんおはよ〜」

「こら悠斗、雪乃さんにその口の聞き方は良くないよ。雪乃さんおはようございます。陽介兄さんのことよろしくお願いします。」

冬馬はいつも悠斗よりしつかりしている。

「おはようございます。陽介の事お願いします。」

兄さんも心配性だ。

光はまだ寝ているようだが残りの兄弟達は挨拶をした。

そして雪乃は…

「それを言うならこっちの方だよ合同のお祓いの時も陽介に迷惑掛けてたし。」

迷惑という言葉聞いた陽介は、

「いつ俺がお前のごと迷惑だなんて言った。

それより行くぞ。現地に1番近くの俺たちが遅れてどうする。」

2人が外に出ると一台の車が止まっていた。

そしてその車から1人の女が出てきて、

「おはようございます。私は義政様よりお二人の案内を任された夜空と申します。どうぞお乗り下さい。」

夜空さんに言われて俺たちは車に乗ると、

「若天様、三神様、義政様が用意された合宿場までお時間があります。

しばしお待ち下さい。」

そう言われて1時間くらいたったころ…

「もう少しで着きますので、ご準備をお願いします。」

そう言われて俺たちが準備し始めて約5分後…

「若天様、三神様着きました。」

そう言われて俺たちは車を降りると俺たちは、しばし呆然としてしまった。

「マジでここなのか。」

「本当にここで合ってますか。」

俺たちの前にそびえ立っていたのは別荘とは思えないほど綺麗で最近建てられたものとしか思えなかった。

「はい、ここが目的地です皆様が住みやすいようにと義政様が先月リフォームされました。」

何でわざわざと思いつながら夜空さんの案内で中に入って言った。

中に入り他の候補者が待っているという部屋に向かっていると雪乃が…

「あの夜空さん、今きてる候補者は何人ですか。」

その質問に夜空さんは、

「今来ているのはお二人を抜いて4名京都から天空候補唐沢様、朱雀候補神山様、北海道から騰蛇候補山口様、青森から貴人候補西野様の4名です。」

それを聞いて雪乃は、

「ありがとうございます。」

雪乃が礼を言うと少しの間沈黙の時ができた。

そして…

「皆様このの部屋におられます。」

部屋の扉が開かれた…

く現在6名集合これからどうなるのやらく

5話

俺と雪乃は合宿に参加するために義政様の別荘に向かい、案内人夜空さんに現在の状況を教えてもらい4人が待つ部屋の前まで来た。

「皆様はこの中でお待ちです。」

夜空さんに言われ俺たちは部屋の扉を開けた。

「青竜候補三神陽介様、白虎候補天若雪乃様が到着されました。」

夜空さんに紹介され中に入ると、茶色がかつた髪の少年がいきなり蹴りをかましてきた。

その少年の蹴りを受け止めた俺は、

「いってえな、久しぶりに会ってそれかよ稜。」

「久しぶりだな陽介変わってないな。」

いきなり蹴りをかましてきたこいつは神山稜。

俺の親友でありライバルでもある。

見た目はおとなしそうで見えて結構強いし口調も悪い。

「稜！やめなつて、陽介くんごめんね。」

稜のかわりに俺に謝ったのは、唐沢未来。

とてもおとなしい性格で12人の中で一番戦闘と無縁であり、ちよつと泣き無理な一面もある。

「未来ちゃん元気だった！」

「雪乃ちゃん久しぶり！会いたかったよ。」

雪乃と未来はとても仲がいい。

俺たち12人は元々本土にいた。

本土には多くの陰陽師がいる。

しかし7歳の時に各地方に別れることになったので本土にいる義政様に報告の際に時々会うぐらいになった。

「お前に会うの何年ぶりだ陽介。」

「さあ2年ぶりくらいじゃないか。」

4人で仲良く話していると…

「何4人で話してんだ。」

「僕たちも入れて欲しいです。」

その声と姿を見た俺は…

「浩介、天都久しぶり。」

こいつらは山口浩介と西野天都。

浩介は口調は荒いが根はいい奴。

目つきが悪いせいかもしれない。いつも周りをいつも威嚇しているように見える。

天都は人に優しく花や動物が好き。

少し引つ込み思案などともあるが弱音を吐かない。

「今集まってるのは俺たちだけなんだよな…」

俺が独り言のように呟くと、

「合宿なんて今いる俺たちだけでいいんじゃないやねえの。」

俺は浩介と同じ考えを持っていた。

いや俺だけじゃなくおそらくここにいる6人全員が思っているだろう。

「僕もです、僕もここにいる皆さんと合宿がしたいです。あの6人は正直嫌いです。」

やはり天都もか…

「やっぱりみんなもなんだね…」

雪乃が周りにつられて呟いた。

「浩介、俺もだいやここに居るみんな思ってることは同じなはずだ、今来ていない6人を俺たちは嫌っている、そうだろう。」

稜の言葉に俺含め5人は首を縦に振った。

「…だよな…だってあいつら俺たちの方が実力があると言ってる見下して来て、合同の時だって俺たちが出るなんてありえないとかぬかして参加しなかったりするんだぜ。」

稜が怒りを露わにしているのは見れば分かる。

「あの…今夜空さんから電話があったのですけど。」

彼ら6人はここで私たちと合宿なんてしたくないらしくて彼らの親が用意した合宿場で合宿するそうです。」

それを聞いた俺たちは…

「あいつら好き勝手しすぎだろ。でも一緒に合宿しないでいいのは正

直嬉しいな。」

浩介の気持ちは誰もが分かっていた。

「ならこのまま俺たちはここで合宿するそれでいいな。」

稜の質問に俺たちは『異論なし。』と答え、今日はこれで解散と流れになった。

しかし俺はみんなを引き止めて話さないといけなかったことがあった。

羅刹のことだ。

そして皆に話すと、皆は呆然としていた。

そして浩介が口を開いた、

「陽介それ本当なのか…」

やはり疑っているように見える。

そしてしばしの沈黙を破るかのようにある人の声が部屋に響いた。

「それについては私からちゃんと話さないといけませんね。」

義政様だ、おそらく本土からある術でこちらに思念体を作っているのだろう。

「陽介くんが言っていることは本当のことです。」

その言葉に皆が驚いた。

「順に話さないといけませんね…その前に陽介くん君が契約した鬼はどうですか。」

義政様は俺に羅刹については聞いて来た。

「羅刹は俺に力をくれると言ってくれました。今は俺の刀として一緒に戦ってくれるそうです。」

それを聞いた義政様の思念体は、

「そうですね、大事にしてあげて下さい。」

それし義政様は一息つくくと、

「では話しましょう過去から今につながる、神器の話。」

そして俺たちは神器について知ることができる。

俺からどう物語が変化していくか俺たちは知るよしもなかった。

6話

義政様は俺の父が知らないことまで知ってる。だからこれを気に知らないはこの刀のこと、羅刹のことを…

く私の先代清明様その時、妖怪をも恐れおののいていた12体の鬼がいました。そして人間たちに被害が出ないように12個の武器に封印し神器として、初代十二神将に預けました。そして今は今も受け継がれていますが鬼にも心があるゆえ鬼が使用者を認めない限り神器は使えません。現に初代から今までの十二神将の中で初代しか使えていません。そしてその武器の1つが陽介君、君を選んだのです。その刀は君の一族三神家に受け継がれていた神器です。く

そして話が一区切りしたところで雪乃が聞いた。

「では、私たちの一族にも受け継がれた神器があるのですか？」

「はい、12家全てに受け継がれているので存在します。では、その神器が何かを説明しましょう。」

く陽介君が契約したのは先ほども言ったように、三神家つまり青竜に受け継がれたもの、白虎、甘若家には鎌の夜具、天空、唐沢家には杖（ロッド）の須須、朱雀、神山家には刀の八瀬童子、騰蛇、山口家には薙刀の邪鬼そして貴人、西野家は弓の阿修羅です。く

全員分の武器と鬼の名前を聞くと稜は、

「それはどこに封印されていますか。」

「それは各家の封印場所にあります。皆さん試されてみますか？」

義政様の問いかけに4人はすぐさま答えた、

『行きますー！』

それを聞いた義政様は、それを許可された。しかし、夏休みまで待てとのこと、「皆様は中学生、学業を優先してはいいので長期の休みである夏休み待ってください。」ということだ。しかも皆いつもならすぐ行くとか言いそうなのに、即決で、待つと言った。

俺は驚くこともあったが、ここで口を出したらややこしくなりそうなのでやめた。

そして話が終わると義政様は帰られた。

―その夜―

「んじや、そろそろ各自ゆつくりした方がいいし部屋決めといくか！」
部屋は多人数で合宿予定だったため1人部屋もあるし2人部屋もある。

すると未来は、

「私、良ければだけど雪乃ちゃんと同じ部屋がいいかな、久しぶりにあったしいろいろ話したい。」

雪乃はそれを喜んで承諾、女子2人は部屋が決まった。

「俺は天都と同じ部屋で頼む。こいつ1人にするのは何かと心配だから、」

浩介は心配性だ。

「んじや俺は、陽介とだな、他のみんなが2人部屋なのに俺たちだけ1人部屋というのもあれだからな、」

これで皆の部屋が決まった。

そして各自の部屋に行き、ゆつくりすることにした。

―稜と陽介の部屋―

「やつと落ち着いたな、」

稜はいすに腰をかけた…

「そうだな、今日は色々あったし」

それよれ俺はふと疑問が浮かんだ。

「なあ稜、お前学校どうなるんだ、もう転校手続き出来てるのか。」

その質問に稜は、

「さあな、月曜日になれば分かることだろう。もう俺は寝るぞ、また明日。」

稜はそう言うのと本当にベットに入って寝た。俺も疲れていたのそのあとすぐ眠りについた。

―月曜日―

俺と雪乃はいつもより早く家を出た。稜達は各学校での転校手続きがあると言って先に出た。

俺たちは違うクラスなので教室の前で別れると、俺の教室はいつも以上に騒がしかった。

いつも騒がしいけど今日はやけにぎざわしてたしいつもおとなしい女子まで騒いでいた。女子達の口からは「どんな人だろう。」
「カッコいいかな」

と聞こえてくる。その様子からして、どうやら転校生が来るのだろう。

でもなんか嫌な予感がしてきたと心で思っていると、

「全員席につけ」

担任が来て教室は静まりかえった。

「今日は、転校生が来ます。入ってきて、」

入ってきたのは、見覚えのある髪に京都の制服…

嫌な予感が当たった…

「京都から来た、神山稜です。」

俺は驚くことしかできなかつた。

〜夏休みまで1ヶ月…それまで今までどうり生活できるかな…

7話

合宿が始まり、夏休みまで学校ではいつも通りの生活を送れると思っていた……しかし

「京都から来ました。神山稜です。」

俺のクラスに稜が転校して来た。これから大変なことになりそうだ…

1限目が終わり、俺は雪乃の元へ行き昼休み人目のつかない屋上まで来るように言った…

そして昼休み、稜の周りには沢山の人が集まって居た…それもそのはず、稜はいつもの荒っぽい口調を隠し大人しめな雰囲気醸し出し、クラスの女子のハートを一目で射抜いた…

そんな女子たちに囲まれている稜を引きずり出し俺は雪乃の待つ屋上に足を運んだ。

「稜、一体どうゆうことだよ。お前が転校して来るなんて聞いてないぞ」

昼休みのこの時間まで俺は何度もこの質問を稜にしようと試みた。しかし、稜の周りにはたくさんの女子で話しかける暇すらなかった。

そしてその質問を聞いた稜は、ニヤツとしてやったりという顔をしながら、俺と雪乃に…

「だから言っただろ、明日のお楽しみだって…」

俺はその言葉を聞き、呆れながらも次の質問を繰り出した…

「他の3人は違う学校なのか？」

それを聞いた稜は少し黙り、渋々口を開き始めた。

「浩介は隣の私立の学校。未来は…同じ学校に同じ年が2人もいきなり転校して来るのはおかしいからと、近くの女子校に…あ、天都は同じ学校だ…あいつ一個下だし…」

それを聞いた雪乃が口を開いた…

「じゃあこの学校に4人あるんだね…」

そう言った後俺は周りを少し確認して居た、それは先程から稜のこ

とを呼ぶ女子たちの声が聞こえるからだ、そしてそれを気にしてる俺の隣に居た雪乃は稜に近づき、小声で呟いた。

「陽介は気づいていないみたいだけど、稜君…未来ちゃんと同じ学校が良かったんだね…やっぱり、未来ちゃんのこと好きなんだ…」

それを聞いた稜は顔を赤くしながら雪乃から離れ俺にまで聞こえる声で：

「はあ!!う?そ…そんなんじゃねえよ!」

そしてその声に気づいた俺は稜に何があったかと聞くが教えてくれず、雪乃も鈍感と俺に一言残して教室へ戻っていった。

そして帰り際俺は何度も稜に何があったか聞くが教えてくれなかった。

従業員が終わり放課後、俺は帰ろうと席を立つと、やはり稜は何人かの女子と男子に囲まれて居た。

「稜君はどこに住んでるの?」「知りたいな…」

と女子が聞くと、稜は何も隠す気がないのかさりと…

「え?住んでる家?今は陽介とあととは…知り合いと…」

俺は稜が全て言い終わる前に稜の口を慌てて塞いだ、そしてそれを女子が：

「ちよつと!陽介君、稜君に何してるのよ…」「離しなさいよ」

と怒ってる女子たちに逆らえず俺は渋々稜の口から手を離れた、それを見た女子たちはまた同じ質問を稜にした。

そして今度は俺の邪魔が入らず、稜は全て答えた…

「え、もう一度?だから俺は陽介と知り合いの家に住んでるよ」

言ってしまった呟きながら頭を抱えている俺の隣で目を丸くする女子と男子…

少しみんな硬直し、大声をあげながらまた質問して来た。

『え!どうゆうこと!』『何で陽介君と一緒に住んでるの!』

と次々に俺と稜に質問して来る…それを稜は全て冷静に返答していく。

「俺は今、家の事情でこっちに来て居て、こっちにいる間知り合いの陽介と俺たちの知り合いの別荘で暮らしてるんだ。」

稜の返答に落ち着いたのか一度質問せめは止まったものの、次は意外なお願ひ？が来た。

「ならば…今日、稜君たちが住んでる家に遊びに行ってもいい？」

1人の女子の言葉にその場にいた者たちがそれはいい！そうしよう…と騒ぎ立てた…

俺は、反対したが別にいいだと、稜がいいその場にいた男女合わせて4名と一緒に別荘に帰ることになった。

のんびり過ごせるはずの学校…これからどうなるのやら。

夏休みまであと1ヶ月をきった…これからどうなるのやら…

8話

稜が転校してきた初日の放課後、俺は何故かクラスメイト男女4人と共に帰っている。

先ほど教室で稜と俺が同じ家に住んでいる事が知られ遊びに行きたいと言われ仕方なく一緒帰っているのだが……嫌な予感しかない

俺たちが住んでいる別荘に着くと

4人は呆然と別荘を眺めていた：

10秒ほど眺めたままの4人に俺は声をかけようとすると。

「何これ別荘！凄すぎ！」「え！稜君達お金持ちなの！」

と次々に凄いという言葉を告げておりそれを聞いた稜が普通だろと呟き「さっさと中に入ろう」と言い俺たちは別荘の中へ入った。

家の中に入ると4人をリビングに案内した。

4人を案内して稜を残し俺は飲み物を取りに行った。

その時だ：

ガチャと扉の開く音がした、それと同時に聞こえてくる2人の笑い声。

「やっぱりそうだったんですね」「ええ……」

声からしてすぐに気がついた。

未来と雪乃だ、2人は違う学校のため恐らく帰り道で出会ったのだろう。

しかしまずい。このままりビングに行くとも4人に鉢合わせする。

そう考えどうにかしないとと思ったがすでに遅かった。

「ただいま。誰か来てるの？」

「ただいま帰りました。稜お客さんでも来てるの？」

2人はリビングに入ってくると4人と稜、俺は固まった。

俺たちだけじゃない、雪乃もやってしまったと言わんばかりに少し焦りみを見せていた。

この沈黙を破ったのは遊びに来ていた女子達だった。

「ちよつと陽介くん何これ！聞いてないんだけど！」

「なんで雪乃さんまで1つ屋根の下なのよ！」

4人による質問のラッシュ、俺と稜、雪乃は止まっていると未来が

「お話中すみませんが、少し混乱しているようなので後日お話しされねはどうでしょうか。」

未来の優しい言葉遣いと微笑みに負けたのか男子は「は、はい！分りました！」と言って女子2人を連れて帰っていった。

流石と言わんばかりの行動に俺たちは感謝を述べていた。

明日は大変だなと3人で今から疲れた表情をしながら一種の嵐は去っていった。

4人が帰ってからは地下の稽古場で組手に霊符を使い実践練習、霊符の錬成と日々の鍛錬をこなして1日が終わる。

―次の日の夜―

稜、雪乃、俺の3人はリビングでぐったりしていた。

それもそのはずだ。昨日きた4人が校内に俺たちが同じ家に住んでいることを広めたからだ。

朝から俺たちの机の周りにはその噂を聞きつけた連中がうようよしていた。

「なんとか収まったけど、もうこりこりだ」

ぐったりしながら俺が言った言葉に2人と同じく共感していた。

その様子を見ていた浩介は「パンツ！」と手を叩くとみんなに聞こえる声で

「今回だけは特別だ、今日の稽古はなし。明日に備えて休むこと」

その言葉を聞いた俺含む3人はこの時初めて浩介が優しいと感じた。

この日は今まで以上にぐっすり眠ることができた。

明日からはまた鍛錬を日々が始まり夏休みには皆の神器を取りに行く。

まだまだ先が長い夏休み。

それまでに少しでも強くなれるかな……………

9話

家にクラスメイトが押しかけて来てから約2週間が経った。夏休みに神器の契約に行くにあたって必ず突破しなければいけない試験が待っていた。それは1週間後には期末考査だ。

その頃俺たちはと言うと……

「この中で一度でも赤点取ったことがあるやつ手を挙げろ。」

いつもより険しい顔をした稜は俺たち全員をリビングに集めた。

稜の言葉を聞き、浩介、雪乃、そして俺の3人は大人しく手を挙げた、雪乃が手を挙げたのをみて未来が驚いた表情をしているのが目に見えた、

「雪乃ちゃんて頭良かった……よね？」

「ちよつと、部活の助っ人が忙しかった時に一度……」

2人の会話を聞いていた稜は、雪乃は大丈夫だろうと呟くと俺と浩介の方を見て……

「問題はお前らだ赤点常習犯ども！」

それから稜の説教が始まった。

稜は勉強に関して怒らすと怖い。

「陽介！お前にはいつも言ってるんだろ！予習復習しろって昔からあれほど……」

「す、すいません……」

勉強の事になると俺は稜に頭が上がらない。

俺は昔から稜には勉強を教えてもらっていた。

そのせいか赤点を取ると怒られる、今回は説教が長そうだと思いがら深々と頭を下げて反省していた。

「浩介お前もだ！お前は勉強さえすれば点取れるんだからちゃんと勉強しろ！」

「お、おう……」

浩介も勉強になると稜に頭が上がらないようだ……

それからと言うもの俺と浩介は稜の説教を30分以上受けた。

しばらく聞きたくないな。

それから1週間毎日の鍛錬の時間を少し減らし稜の勉強会が始まった。

そしてテストを受け返却の日の夜…

『あ、赤点が…ない！』

稜に、教えてもらった成果があり俺たちは赤点を回避し無事夏休みになれば神器を取りに行ける。

その状況を見てた稜は

「いや、良かった。陽介が赤点取れば神器取りに行けないからな」

やはりそれか…

稜は俺に優しいのか優しくないのか分からないな

そんな他愛もない日常はすぐに去っていき色々明日から夏休み。

やっと神器の契約に行けると4人は待ちに待っていたから楽しみだろう。

しかし、その前に決めないといけないことがある。

それは契約に行く順番だ。

流石に4人一斉に行くのは不可能。そのため順番を今から決める。

4人はピリピリしていた、それだけ待ちに待っていたのだ。

「よし、準備はいいな…」

浩介が3人に確認すると3人は何も言わずに頷いた。

「よし、いくぞ」

『さいしよはグージャンケン……』

—次の日7月20日—

「よっしゃー！行くぞ北海道！」

昨日の夜ジャンケンに勝ったのは浩介だ。

20回以上のあいこの果てに勝利した。

3人は負けを認め早く契約が終わらないかと思っている。

「待ってろよ邪鬼！必ずお前と契約してやる！」

決意を固める浩介を俺たちは支えていく。

—その頃ある空間では—

「ふふっ…ボクと契約出来る子はいるのかな…楽しみだな」

自身が封印されている武器の上、鼻歌を歌いながら人間が来るのを

今か今かとたち望んでる人影。

一体何者なのか……

これから向かうは北海道。

向かうまでにいくつか試練はあるだろうが俺たちなら大丈夫だろう。

いよいよ神器契約編突入これから何が起こるのか……また次のお話。

10話

東京を出発した俺たちは義政様が用意してくれた車に乗り北海道へと向かった。

車の中、雪乃と未来そして天都はスヤスヤと寝ていて俺含む稜と浩介は起きている。

浩介は何度か寝ようと思ったのか目を閉じるもすぐに開けソワソワとしている。俺と稜には緊張していると目に見える。

俺は緊張をほぐそうかと話しかけようと思うとそれより先に稜が動いた。

「浩介、緊張してるのか？お前らしくないな」

稜は浩介を煽るように話している。この発言はいつもの浩介ならんなわけあるか馬鹿などと喧嘩が始まる……………はずなのに

「悪いかよ……………失敗するかもしれないと思うも怖いんだよ……………」

俺と稜は言葉が出なかった、どのような言葉をかけてやるべきか分からなかった。

この時、鬼と契約する怖さということを改めて実感した。

「大丈夫だ、俺や陽介、他の奴らもついてるんだから。安心しろ。」

稜の言葉を聞き少し安心したのか浩介はありがとうと一言言いゆつくりと目を閉じ眠りに入った。

その後俺と稜は少し話あることを決めると到着まで時間があるので眠りに入った。

この時東京で俺たちと同じように鬼の話を聞き契約に向かう者たちがいるとも知らなかった……………

〜東京、とあるホテルの一室〜

「…以上が、義政様より頼まれた伝達内容でございます。」

案内人である夜空は義政により頼まれた内容を伝え終わると読み上げていた紙を閉じた。

聞いているのは6人。

ソファで偉そうに座り聞いている者、その後ろに静かに立って聞いている者、ケータイを触り聞いているか分からない者。枕を抱いてス

ヤスヤと眠っている者。2人がけのソファに2人で座って聞いている者。

「皆様契約に向かわれるようでしたら先に出発された三神様方と合流をお願いします。」

契約の場合現在契約済みの陽介の同行が必要だからと合流するようにと伝え、相手に敬意を払うようにゆっくりと頭を下げていた。

「は？俺様が合流するわけないだろ。」

自身のことを様付けをして合流を拒否するいかにも偉そうな態度でソファに座る男がいた。

銀髪の短い髪に赤い瞳、片耳にはピアスをつけていかにも偉そうな格好をしている。

「俺様がクソな陽介の手を借りる？そんなことをするわけがねえな」

威勢のいい発言とともにソファから立ち上がったこの男は月影風雅。実力があり多くの者を見下しており、その性格からか陽介達とは仲が悪い。

「しかし、義政様より合流しないのならば契約には行かせられないと…」

夜空は風雅を止めた。それは当然のことだった。鬼との契約に失敗すれば精神が乗っ取られる可能性があるからだ。

しかし、夜空の止める声は届くことなく他の者達の声に阻まれた。

「問題ないに決まってるじゃん。そんな脅し聞いてちやキリないよ。」

ケータイを触りながら話を聞いていたこの女、赤い長髪をなびかせ青い瞳を画面からこちらに向けてと笑いながら続け

「もし本当でも私たちの力なら問題ないし。」

見た目からは陰陽師には見えないこの女は中村彩乃。6歳の時ずば抜けた力を見せて天才少女と呼ばれていた。

天才と呼ばれていたからと言って失敗しない保証はない。そう思い夜空は反論しようと口を開こうとしたが

「煩い……人が寝てるんだから静かにして…契約とかそんなの興味ないんだから。」

話を遮るように発言したのは先ほどまで枕を抱いてスヤスヤと

眠っていた男。

この男は御幣島祐樹。少し長い黒髪を後ろで束ね、赤い瞳を持つ顔の整った少年。十二神将候補の中で最年少の彼は何事にも興味がなくいつも眠そうにしている。

最年少だが候補に選ばれるくらいなので実力は相当なものだろう。先ほどまで寝ていた彼は目をこすり欠伸をすると続けて

「僕がどう動こうが僕の勝手、他人に決められたくない」

文句を言うようにその一言だけ言うともた枕を抱いて眠りについた。

祐樹が話し終わったのを確認してから風雅の後ろに立っていた1人の男が一步前に出て夜空に敬意を払いながらも自身の意見を述べ始めた。

「我々6人の意見は風雅様と同じです。義政様の名には従わず私たちが力で鬼と契約いたします。」

意見を言い終わるとニコリと微笑みながらすこし頭を下げていた。

風雅や彩乃、祐樹とも違い敬語を使い紳士的な行動をするこの男は野良竜司。風雅への絶対的信頼を置き執事のように身の回りの世話をしており、彩乃たち4人にも風雅ほどではないが敬意を払い同じ態度を取っている。

「川上様、八戸様も同じ意見でありますよね？」

竜司は確認するかのようにソファに座っている2人の女性に声をかけた。

右手に座る桃色の長い髪をハーフアップにし桜の髪飾りを付けており、他のものより落ち着いた雰囲気的女性は川上千里。

うさぎのぬいぐるみを抱きながら話を聞いていた彼女は話しかけられるとニコリと微笑み自身の意見を口にした。

「私はみんなと同じ意見だよ…ねえ、キララ」

同じ意見と述べた後自身の抱えているぬいぐるみに向け賛同を求めていた。

うさぎのぬいぐるみは千里の言葉に答えるように動き始めた。

うさぎのぬいぐるみだと思っていたが違った。ぬいぐるみではな

く千里が使役している式神だった。

彼女は12人の中で一番使役している式神が最も多い。その数は40

プロの陰陽師でもこれほど指摘している者はおらず多くの者から一目置かれている。

左手に座る水色の長い髪を藤の花の簪でゆい和装をしており、彩乃や千里と違う雰囲気が漂っているこの女性は八戸祐美。

「うちは皆さんの意見に賛同します。うちは風雅さんらについて行くだけやさかい。」

ゆつくりと話終わるとニコリと微笑んでいた。

6人の意見は全員同じだった。

案内人の夜空は必死に考え直すように止めようとしたが思い届かず6人は契約に向かった。

この後、この行動が引き金になるとも知らずに

北海道、札幌市

17時間かけ、浩介の家に着いた俺たち。これから現十二神将である浩介の父康二さんから話を聞く。

浩介は深呼吸すると家の扉に手をかけた動き出す2組、契約はうまくいくのか？